

『赤ちゃんの愛欠病』

セルマ・フレイバーグ著

田口恒夫訳

日本放送出版協会

最近、新生児や乳幼児に関して、心理学や医学等、多方面から光が当てられるようになり、画期的研究の成果を、テレビや書物を通じて、家庭にいながらにして知ることができる。しかし、新前の母親である私自身の体験から顧みると、それらの最先端の学問的真実と、現実に一歳半になる瑞々しくなやかな娘に対して、私が実践してきたこと（即ち、近代的施設の病院での出産、少しではあるが仕事を続けながらの核家族の中での育児との間には、深い溝があることを身を持って感じているこの頃である。

そんな折、私は、ミシガン大学の児童精神医学者セルマ・フレイバーグが知識

として「知られていること」と、現実には幼い子どもに対して今「行なわれていること」との間に、一本の橋を掛けることができればという願いで綴った一冊の本を手にしたことができ、一つの指針を得ることができたので紹介したいと思う。著者は前書きで声高に言う。「子どもは自分の人生における最初の相手の人、すなわち両親とのかかわりを通して、愛することを学ぶ。この奇跡的な出来事は、赤ちゃんに対する愛の「贈物」だと考えることもできる。しかし赤ちゃんにとってこれはひとつの権利であり、すべての子どもの生得権ともみるべきものである。「マザーリング」……まさにこれ

が、赤ちゃんの愛する心、信頼する心、生涯にわたって愛する相手とつながる心をはぐくんでいるのである」と。

しかし、赤ちゃんの生得権である。人生最初の二年における母子一対一愛着関係が、「不幸な出来事、災難、あるいはまわりの人々の無関心など」の為に、侵されると、「その子は将来とも、心から相手の人を愛する能力や人間社会を愛する能力の減退ないし枯渇した人になる」これを著者は、この本の題名でもある「愛欠病」と名付ける。愛欠病は、厳密に言えば、神経症とも精神病とも異り、自我の形成期（人生最初の十八ヶ月）に起った、自我の構造的な弱さないし形成異常である。

愛欠病の特徴は、「人間的愛着の形成ができないということである。そういう人に個人的に会ってみると、なんとなくあいだに空間があり、へだたりがあり、「つながらない」という印象を受ける」

又、感情面での貧困さ、知能や学習能力の低下、对人的社会的行動の障害、冷酷な人柄等の特長をもつという。

困ったことに、現在、愛欠病の子ども数が増加の傾向にある。これらの愛欠病の人達の問題が切っ掛けとなり、研究者達が、初めて、「赤ちゃんが将来育るべきない人間愛を持った人間家族の一員に育ってゆく為の基礎づくりとして、普通の赤ちゃんとその親とのあいだでは、いったい何が行われているのだろうか」という素朴な疑問の解明が始まり、過去40年間にその答えが出て来た。今まで当たり前のことである為に注目されずにいた「愛のコトバ(赤ちゃんと親との間で生後最初の一時間以内に始まり、その後の二年間でどんだん手の込んだものになっていく、親子の「対話」、目のコトバ、ほほ笑みのコトバ、欲求のコトバの他、身ぶりや信号」も解読可能になり、乳児期の愛の絆の発達過程が明らかになった。その結果、様々の専門領域の学者の一致

した意見として、「永続的な愛や献身的な愛などという人間的な性質は、人生最初の二年間に作られるものであり、その時期を失ってしまったら、もう取り返しがつかない」という冷厳な事実に突き当たったという。

内容構成は一章「赤ちゃんの生得権」二章「人を結ぶ絆」では、乳児期における人間的愛着心の発達過程が、発達心理学的視点の他に、民族学的視点(地理的、社会的に隔絶されている辺境の三種族間に共通して見られる。自宅出産、母乳等の育児法と、出産後すぐに始まる母子の絆が形成される「敏感期」との関係の考察)、生物学的視点(コンラッド・ローレンツの研究を参考に、愛と攻撃性の相互関係の検討)という独特の視座を盛り込んで探求されてゆく。三章「親権裁判」四章「託児産業」では、前章の知見を踏まえて、米国の子ども及び家族に関係した社会機構の中で現在実践されていることを顧みた時、いかに子どもの愛される

権利が犯されているかが、ニューモアたっぷりの中にも辛辣に照らし出されてゆく。終章「子どもを守れ」は、昔から部族の中で、子ども達を皆で守り育ててきたように「人間的愛着を第一義として」赤ちゃんの生得権を、私達すべてが守り保障するような文化と社会の再建の必要性が述べられ締めくくられる。

今日の日本において、ベビーホテルでの悲報ひとつ取ってみても、やはり、物言わぬ赤ちゃんの、可愛がられる権利が真先に侵されようとしている。そのうえ愛欠病は、著者の多様な視座からの展開で明らかにされたように、単に赤ちゃんの問題に留まらず、子どもと大人の織り成す様々の人間的問題と、深い基の部分で繋がっていることを忘れてはなるまい。この本を子どもに関心のある人でなく広い分野の方々を読んで頂き、乳幼児期の子ども達が充分な愛を育めるような後楯となってもらいたいと思う。

(美谷島いく子)